

【事例紹介】

県と大学の重層的連携

－埼玉モデルの実践事例－

A Case Report of Stratified Collaboration Between Local Government and Universities: Introduction of Saitama Model

埼玉大学国際本部・教授 中本 進一

NAKAMOTO Shinichi

(Professor, Office of International Affairs, Saitama University)

キーワード：グローバル人材育成センター埼玉（GGG）、自己効力感、異文化リテラシー

1. はじめに

地方行政と大学が連携して留学生をサポートする際、2つの理念形成が重要となる。1つ目は、そもそもなぜ留学生支援を行うのか、そして2つ目は、地方行政と大学の連携はなぜ必要かについての理念である。日本人学生も留学生も、学生には変わらない。両者間に過剰な線引きをしてしまうことは、いわゆる「出島」的な受け入れにつながる。埼玉県と埼玉大学が「グローバル人材育成センター埼玉（以下、GGG）」を立ち上げ、留学生交流拠点整備事業に手を挙げる際に協議したのは、留学生のニーズの核心は何かということと、大学が単独で支援するよりGGGが効果的にできることは何か、ということであった。

留学生のニーズに関しては、日本を選択して学位を取得しようとする留学生が、将来日本に留学したことが正しい選択であったと思えること、すなわち自己実現と進路についてのサポートが幹事会等で議題の中心となり、GGGは県内企業へ留学生の就職を促進する具現策の検討に入った。学年に差別を置かない留学生就職支援セミナーの開催、県内の企業とのマッチングなどが例として挙げられる。

一方、就職支援も学生支援も個々の大学で行われている。それでもなお県や大学のコンソーシアムが連携するメリットのひとつに県規模での国際交流事業がある。日本人学生も留学生も他大学の学生と接触することで、ネットワーク拡大が加速するだけでなく、異なる価値観との継続的な出会いは、いわゆる人間力を育成していくためには不可欠なものである。

GGG の発足当初、留学生支援に関しては、入口（留学生の県内誘致）と出口（就職支援）が活動の中心であったが、6年という月日の流れとともに、現在では県内での留学生の日常生活サポートの重要性についても議論されるようになった。留学生が「埼玉県だから」という理由で大学を選ぶことは、個人的な理由（親族等が県内に在住しているなど）以外はほぼない。留学生たちは3~4年以上生活をしながらも、地元のことについてあまり深く学ぶことなく卒業（修了）していくケースがほとんどである。地元のことにも留学生にも誇りを持ってもらうこと、留学生との接点が日本人学生にとっても実践的な学びの場を提供してくれることを念頭に置き、GGG は交流事業の企画運営の重点化を図るようになった。本報告では、過去数年における就職支援に関する実績とともに、日本人学生の異文化リテラシー向上と、留学生の自己効力感の高揚を理念に置いた学生生活における交流事業、具体的には中島記念財団の支援を受けて実施している「埼玉学のすすめ」と呼ぶ留学生交流事業と「高校生のためのグローバルセミナー」等を中心に紹介する。

2. 着実に伸びる県内企業への留学生誘致実績

平成25年に発足した当初から、GGG は県内の外国人留学生を中心に、就職支援を積極的に行ってきた。事業の中核に据えてきたのは、県内のメンバー大学を巡回する就職相談や、県内企業と留学生が直接会うことのできる「グローバル人材向け就職面接会」やインターンシップ説明会、実践用ビジネスマナーなどを組み入れた就職セミナーなどである。日本における就職活動は、文化的特性の強いものであることから、留学生の就職への誘いにおいては、目標値を掲げつつ各事業を展開することとなった。以下に過去数年間の推移を報告する。

	平成 26 年度		平成 30 年度	伸び率
学生登録数	394 人	→	611 人	55%
求人登録	551 人	→	775 人	41%
県内企業内定	69 人	→	115 人	67%
就職面接会参加学生	145 人	→	388 人	168%
留学生向け就職セミナー	22 人	→	85 人	286%
企業留学生 OB/OG 訪問ツアー	9 人（平成 29 年度より）		→ 16 人	78%

ここにあるように、軒並み数字的には順調な伸びを見せている。しかし、数年前より、一部の県内企業からは、留学生を雇っては見たものの、半年持たずに辞めてしまった例などが GGG に情報として聞かれるようになった。これを受け、GGG は県内企業に就職した元留学生のフォローアップ調査を開始した。聞き取り調査からは、メンター制度や上司など社内における相談役の存在や相談窓口の有無が勤務継続には必要であることが分かってきたが、これらの貴重なデータをどう活かしていくのかが

今後の課題となる。

3. 埼玉学のすすめ

公益財団法人中島記念国際交流財団が助成する留学生地域交流事業において、埼玉大学は過去6年連続で採択を受けている。埼玉県では、「埼玉学のすすめ」と称し国際交流を企画してきた。端的に表現するなら、留学経験や留学予定のある日本人学生と県内外国人留學生が会う県内のバス旅行である。しかし実施上の趣旨は、日本人学生と留學生が共にモノづくり等に参加することで体験を共有すること、そして外交プロトコルを念頭に置いた日本人学生（もてなし側）のための事前研修と外国人留學生のバス旅行に臨むミッションに集約されている。グローバル化が浸透する現在、どこで就職しても海外からのゲストに対応できる異文化リテラシーは重要なスキルの一つとされる。そのために、ゲスト対応の異文化間コミュニケーションスキルや、話題提供法などを中心に実践的な研修を全2回（計4時間）行い、県内名所案内に必要な通訳演習、「やさしい日本語」の表現法、異文化対応のマナーやエチケット、グループリーダーを中心にバス内での話題提供術や交流イベント企画力などを養成していく。研修は学生たち自らが課題を設定し、問題解決に挑むいわゆるアクティブラーニング形式を取り、グループリーダーとして留學生を引率し各訪問先の案内、レクチャー、通訳担当する際に必要な語学力、コミュニケーション力、積極性を身につける。これに加え、日本人学生はGGGが提供している「埼玉発・世界行き奨学金」を受給し留学を経験した県内の学生が参加することで、他大学の学生との交流の機会にもなっている。

一方の外国人留學生たちも単なるゲストに終始するわけではない。埼玉の各所を回りつつ、個々人が何を学び、何を得たのかについて母語もしくは英語による旅行記をレポートすることを任務としている。また、埼玉県に外国人客が来た場合に、何を見て、何をすべきかのアドバイスをする役目を担うことで、単なるバス旅行の感想文ではなく、彼ら自身が評論家の一人として埼玉の魅力を発信する。すなわち自己効力を発揮できる貴重な機会となっている。



日本人学生を集めた事前研修風景



川越での箸置きづくり体験（平成28年）



大宮盆栽美術館での講義（平成30年）



八潮消しゴム工場見学（平成29年）

『埼玉学』（Saitamalogy）は勿論造語であるが、毎年、訪問地のみならず、学ぶテーマの設定に多くの時間を割いている。基本のコンセプトは、埼玉という地域性とグローバルな発展性の両面性を追求することで普遍的な気づきを促している。例えば、平成28年実施の「日本の技術力！Old & New ものづくり体験さいたまプロジェクト」では、川越の醤油づくりから鉄道博物館での新幹線の鉄道産業まで、日本の新旧文化・歴史・伝統・技術発展にテーマを置いた。また、平成29年実施の「幼少時代の文化基盤を探る：文化比較体験バスツアー」では、文化の違いは幼少時代に体験したものの違いに帰依することに着眼し、日本のおやつ文化や fun eraser（おもしろ消しゴムのイワコー）をテーマに取り上げた。このような企画は、日本人学生の自文化に対する再認識にもつながる。ごく最近では（平成30年）、「3つの「守り」をグローバルな視点で共修するバスツアー」とし、災害から命を守る、環境を保全して次世代につなげる、文化の伝承という視点で県内各地を巡回した。

参加した外国人留学生のみならず、日本人学生からも、埼玉に在住していながら普段行く機会のない場所を訪れ、日本の伝統文化だけでなく、現在の日本に住むうえで重要な問題についても体験を通して学ぶことができ、新たな視点で日本文化を見直す貴重な機会になったという主旨の報告書が多数出てきている。

この埼玉学ツアーの成果は、当日の天候やスケジュールのやむを得ない事故等による変更などには全く左右されない。最重要事項は事前研修の内容と準備である。以下にある年の学生による報告書（コメント）を紹介する。何よりも、中島記念国際交流財団による助成なしには県内大学の連携による研修ツアーは実施できない。この場をお借りし、改めて深く感謝を述べたい。

Oさん（日本・埼玉大学）/Ms. O (Japan, Saitama Univ.)

埼玉学のすすめバスツアーの参加にあたり、私はBチームのリーダーを担当しました。留学経験者として出来ることを思案するなか参加を希望し、事前研修会では参加者と交流する際の重要な意識について学びました。例えば「おもてなし」の精神について、最重要だと思う要素を1つ選んで参加者との関わり方を考え始めるというアドバイスがとても印象に残っています。

当日はスタッフ自身も「楽しむ」ことが大切であると声をかけて頂き、バス内や訪問先で参加者と一体感を感じながらより積極的に交流できました。通訳や質疑応答など難しい場面もありましたが、相手の理解を意識しながら関心や着眼点を学ぶことができたため、非常に勉強になりました。会話を通じて日本や埼玉県と各国の事例を比較し、文化の共通点や相違点を認識できたことも大変興味深かったです。今後もぜひ埼玉学と埼玉県の魅力を発信することについて議論したいです。

Lさん（中国・埼玉大学）/Mr. L,(China, Saitama Univ.)

I am glad to have this opportunity to attend this bus tour. Japanese volunteers are very kind and friendly. They translated Japanese into English for us professionally. We chatted with each other about a lot of things during the trip. Please allow me to express my thanks to them again.

During the bus trip, we visited three places: Iwako, Saitama Stadium 2002 & Stadium Tour and Maruso-Ichifuku Senbei. What impresses me most is Iwako which is a Japanese unique & fun eraser factory. Their products are very innovative which subverts my view on the practicability of eraser. The person in charge of factory let me understand that eraser is not only a practical wipe out tools but also products that can have ornamental value which likes more than a souvenir. This factory reminds me of the ability that people are willing to put their ideas or dreams into action. This reflects Japan's national creativity and innovation which deserve us to learn. Saitama Stadium 2002 & Stadium Tour showed me the Urawa Red Diamond home court. I was lucky to see the channel of players, the lounge, the dressing room, and the warm-up room which are rare to see. Coming to Maruso-Ichifuku Senbei, let me know the process of senbei's production. What's more, I participated in making simple senbei which was a good experience for me.

This bus trip let me experience some of the rare industries and cultural ideas in Japan. I'm glad to be able to take part in this event.

実施日：平成 29 年 12 月 9 日 JASSO 報告書より抜粋

4. 高校生のためのグローバルセミナー

GGG は、留学を希望する学生（高校生、大学生）を対象に埼玉発・世界行き奨学金制度を平成 29 年度より実施している。青年期に一度は外国人として見られる経験を持つこと、家族や友人を離れ、見知らぬ地で新しい環境の中で生き抜く留学経験は、日本をそして自分自身を客観的に評価する能力を身に着けるほか、学生本人の未知な可能性を引き出してくれる。県内学生の留学を後押しするために GGG が展開しているプログラムに「高校生のためのグローバルセミナー」がある。高校生の時代から、

世界に目を向けることで、異文化リテラシーを高め、留学を意識づけるための促進策としてスタートさせた。

大学から参加する留学生たちにとっては、セミナーの最後でのグループプレゼンテーションを控える高校生たちに、日本での経験について語り、外から見る日本に期待すること、求めたいことなどを直に表現することで自己効力感を実感できる場となる。また普段大学という環境では出会うことのない世代の違いとの交流機会となる。

このグローバルセミナーには、毎年、県内各地から約30～40名の高校生が集まってくる。グループに、留学経験のある日本人学生と留学生計20～30名が加わり、8グループに分かれて本セミナーは始まる。年によって異なるが、過去に取り上げてきたテーマは、グローバル人材育成や多文化共生が中心で、高校生たちは午前中のアイスブレイキング、専門家による基調講演に続いてランチを含め夕方までディスカッションを積み上げていく。



専門家による基調講演



ディスカッション風景

5. GGS ホームステイプログラム

ホームステイは、留学生にとっては、日本の家庭に滞在することにより、風俗・習慣・伝統・文化に触れ、日本人とのコミュニケーションをはかり、日本理解に必要な感覚を養う機会を提供するというのが、恐らく一般的な理解であろう。GGSの幹事会で議論になったことは、このことに加え、日本人の家庭にとっても世界への扉の役割を果たしてくれるという位置づけであった。つまり日本人の異文化リテラシーの向上がここでも取り上げられたのである。

プログラム開始当初は件数が少なかったが故、問題はほとんど起きていなかったが、コンソーシアム形式を採用してからは、参加留学生の数が急増し、ひと家庭に二人の留学生を受け入れていただくという状況も頻繁になってきた。それに伴い、実施後のアンケートだけにはとどまらず、各大学の窓口から留学生からの受け入れ家庭に関するクレームが聞かれるようになった。またGGSからも、留学生の言動に不快な思いを経験することになったといった内容の報告があり、数回にわたりGGS幹事会や総会等で議題に上がった。

これを受けて強化されたのが、GGSによるホストファミリーに対するガイダンスと各大学で行われる留学生に対する事前オリエンテーションである。双方がプログラムの内容だけではなく趣旨を共有

することで、トラブル予防につながるだけでなく、トラブルになるケースの過半数が、異文化に対する誤解が原因だったことが判明したことも大きい。GGS と大学間の連携における一体感が高まった成果と言えるだろう。

6. おわりに

昨今の経済財政諮問会議等においても、留学生の国内就職促進については明示されており、目指すところは50%の就職率と言われている。日本の教育機関を経て日本の企業に就職し定着・定住する外国人留学生は、ある意味財産と言える。人材の確保という意味においても、国と国を結ぶ懸け橋的な存在としても、そして何より既に法改正で始まった新しい多文化共生の時代においても、留学生たちは日本社会にとってキーパーソン的な存在になりうると埼玉県は捉えている。

平成25年に日本人学生の送り出しと外国人留学生の受け入れを中心としたワン・ストップの交流拠点として県内大学のみならず経済団体を巻き込んでGGSが発足以降、留学のための奨学金に関しても、就職支援においても、地域交流事業においても、各大学の思いやニーズも異なり、会員大学が少しずつ抜けていく時期もあったが、中には会員に復帰した大学もある。現在では、このように紆余曲折を経験しつつ積み上げてきたことが徐々に実を結びつつある。GGS側も会員大学それぞれに足を運んでニーズの聞き取り調査に力を入れていること、そして各大学も大学単独で行うよりコンソーシアム形式で実施したほうが良いプログラムの重要性等に気づき始めたところである。今後も、留学生のニーズに関する情報収集や、単なる支援だけに終わることなく、県内日本人（一般家庭、高校生、大学生）の異文化リテラシー向上と外国人留学生の自己効力の高揚を理念に据え、コンソーシアム間の連携を重層化していく予定である。